

筑前国分寺

—昭和52年度発掘調査概要—

1978. 3. 31

福岡県教育委員会

発刊のことば

この概報は、史跡筑前国分寺跡の環境整備の基礎資料を得るために、福岡県教育委員会が国庫補助を受けて実施した発掘調査の概要であります。

発掘調査にあたっては、指導委員の先生方には多くのご助言をいただき、また地元の方々には終始ご協力いただきましたことに対し、深い感謝の意を表します。

昭和53年3月31日

福岡県教育委員会

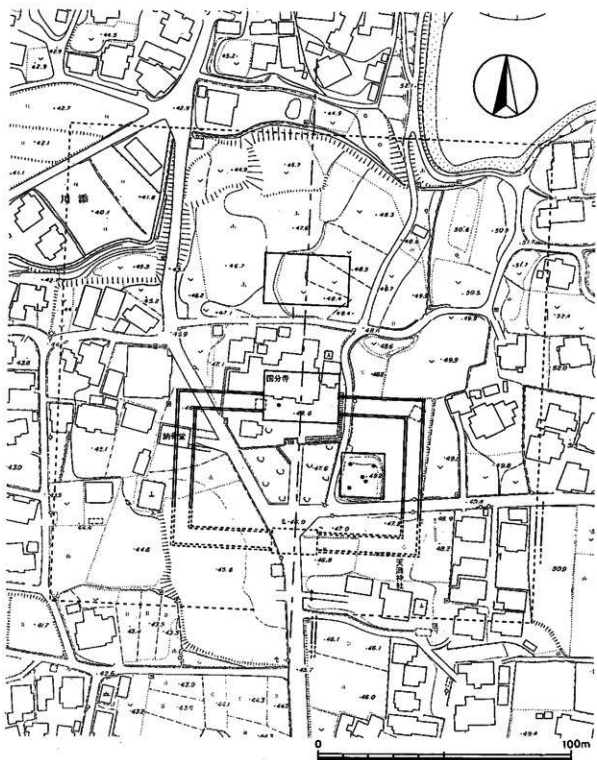
教育長 浦山太郎

例 言

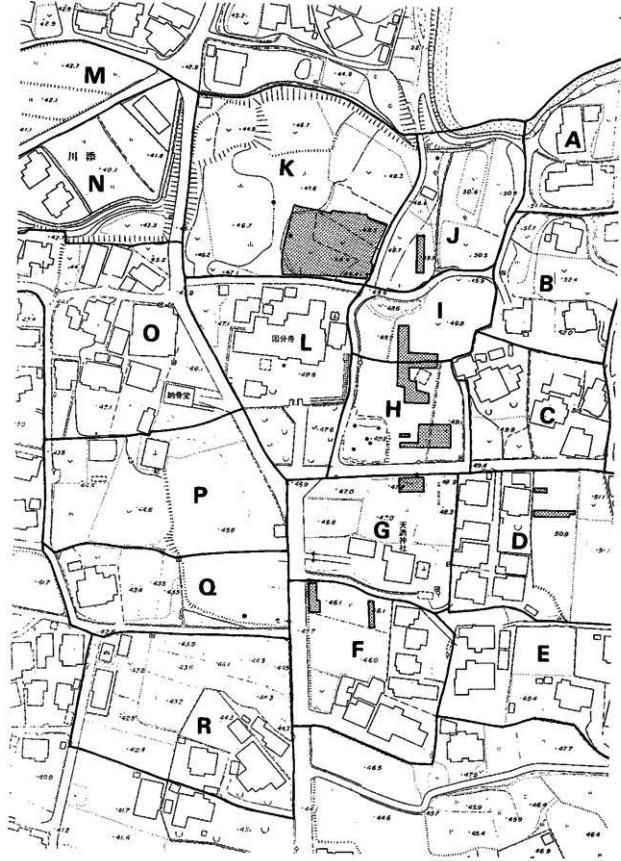
- 1 本概報は昭和52年度に実施した史跡筑前国分寺跡の発掘調査概要の報告である。
- 2 発掘調査は九州歴史資料館技師森田勉・高橋章が担当し、調査補助員として沢田康夫・真玉秀樹が参加した。
- 3 調査指導員として九州芸術工科大学教授沢村仁（建築史）、北九州市立歴史博物館主幹小田富士雄（考古学）の両氏に委嘱した。
- 4 掲載の遺構図面は各調査員が実測したものを沢田が整理・製図した。また、写真は石丸洋による。
- 5 掲載の方位は国土調査法第Ⅱ座標系のGNである。
- 6 本書の執筆はⅠ、Ⅱ-1・2、Ⅲ-1・2、Ⅳ-1・2を森田、Ⅱ-3(1)、Ⅲ-3(1)、Ⅳ-3(1)を沢田、Ⅱ-3(2)、Ⅲ-3(2)、Ⅳ-3(2)を高橋、Ⅲ-3(3)を八尋和泉、Ⅴを倉住増彦、Ⅵを沢田・高橋・森田が執筆した。
本書の編集は森田が担当した。

目 次

Ⅰ 既住の調査	1
Ⅱ 第5次調査	2
1 調査の経過	2
2 検出遺構	2
3 出土遺物	3
Ⅲ 第6次調査	4
1 調査の経過	4
2 検出遺構	4
3 出土遺物	9
Ⅳ 第7次調査	23
1 調査の経過	23
2 検出遺構	24
3 出土遺物	24
Ⅴ 筑前国分寺に関する一史料	24
Ⅵ ま と め	26



第1图 筑前国分寺周辺地形图



第2图 筑前国分寺地区制图

I 既往の調査

史跡筑前国分寺跡の最初の学術調査は「昭和35年1月国分寺の国宝仏像収蔵庫が建立されるに際して」講堂跡・金堂跡・塔跡の一部を実施したのを最初とする。その後福岡県教育委員会により昭和43年から大宰府史跡の発掘調査が開始され、その一環として、筑前国分寺の発掘調査が開始された。

昭和35年以降実施された調査の概要は以下のとおりである。

金堂跡 昭和35年の調査につき昭和49年に庫裏の改築の際、福岡県教育委員会が調査を実施した。その結果、「基壇上は後世の擾乱がいちじるしく、礎石は完全に抜き去られ、その掘り方や根石もまったく確認できない状態であった」。しかし、基壇西端の一部を、更に南端部分の一部を確認し、その規模を東西約30m、南北約20mに想定している。

回廊跡 昭和51年に福岡県教育委員会が調査を実施した。その結果東面回廊の雨落溝を検出し、更にさきに実施した金堂跡の調査結果から、仮中軸線を想定し、回廊の東西規模を109.2m（約1町）と数値を導き出した。

塔跡 昭和51年に福岡県教育委員会が発掘調査を実施した。その結果基壇は上成、下成からなる二重基壇で、上成基壇は一辺55尺下成基壇幅は1.5尺を測り、また平面は30尺四方で、3間等に割りつけ礎石を配しているが、側柱礎の根石の下に基壇築成途中に環状に石を並べている特異な方法を持っていることが明らかになった。そして、創建当初の階段は東・西にのみ付設され、四面に階段が崩うのは大幅に上成基壇化粧の改修を行った九世紀初頭頃と考えられた。

講堂跡 昭和35年に九州大学が一部発掘調査を実施した。基壇南端の調査では敷石を検出し、更に栗石が並んでいることにより北端、東端を、土層序から西端を検出している。以上のことから「推知された講堂の広さは、東西114尺（19間）、南北66尺（11間）となり、講堂の面積としてふさわしい」と報告されている。

註

- 1 現在は重要文化財伝要素師如来坐像として本堂に安置されている。
- 2 鏡山 猛 『大宰府都城の研究』 風間書房 1968
- 3 藤井 功・亀井明彦 『西都大宰府』 NHKブックス 1977
- 4 註3と同じ
- 5 『九州歴史資料館年報—昭和50年度—』 九州歴史資料館 1975
- 6 『筑前国分寺—昭和51年度発掘調査概報—』 福岡県教育委員会 1977
- 7 註2と同じ

Ⅱ 第 5 次 調 査

1 調 査 の 経 過

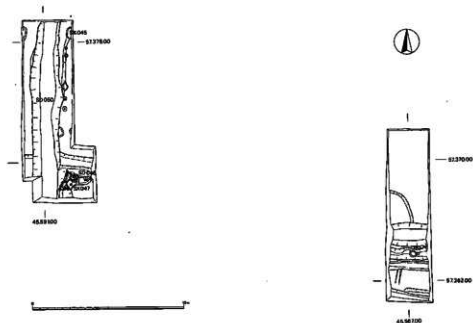
水田を駐車場に造成するとの届出に依り発掘調査を実施した。対象地域が推定南門跡の南に接する地域であるため、南を限る遺構の存否確認を目的として、2本の南北トレンチを設定した。調査の結果、西側のトレンチから南北の溝が1条検出された。このことからこの地より更に北側に南を限る東西の溝の存在が考えられるにいたった。この南北溝の他に数条の溝、土壇およびピットを検出した。調査は昭和52年6月21日から同年7月12日まで実施した。地番は大宰府町大字園分字掘田736-1である。

2 検 出 遺 構

国分寺に関すると考えられる遺構としては溝2と土壇1である。

(1) 土 壇

S K 045 第1トレンチの東北隅で検出した土壇で、東半部は発掘区域外にあるためその規模は不明である。九世紀中葉頃と考えられる土師器が一括して出土している。



第3図 第5次調査遺構配置図

(2) 溝

SD050 南北に流れる幅1.5m～2.0m、深さ約0.7mを測る溝で、西側トレンチ中央部で長さ12mにわたって検出した。

SD046 SD050に接続し幅約1.8mを測る溝である。SD046とSD050の溝底の落差は約0.5mあり、SD046の方が高い。

(3) その他の遺構

SX047 このSD046が接する部分に約40～60cm四方の花崗岩の自然石を2個、面をSD050の方に向けて立置し、その裏に小石を詰めている。いかなる役割りを有した施設であろうか。

3 出土遺物

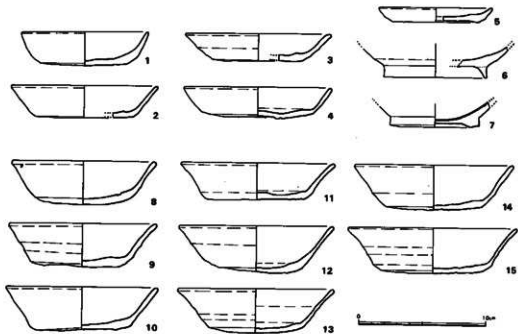
(1) 土器

SD050 出土土器 (第4図1～7, 表)

SD050 出土の土器は上・下二層に分かれ、上層からは土師器がもっとも多く、白磁皿、青磁碗が若干出土した。下層からは図示した他に土師器が多く、青磁片が数点出土した。

なお、土器の説明では特別に記述しない限り底部の切離しはヘラ切りによるものである。

杯(1～4) 口径10.0～11.7cm、器高2.2～2.7cmを測るものである。調整はヨコナゲを基調とし、胎土は砂粒が多く赤味のある乳白色を呈する。



第4図 第5次調査出土土器実測図

小皿(5) 底部切離しは糸切りで調整はヨコナデを基調とする。胎土は砂粒が多く、色調は淡赤茶色である。

碗(6) 高台径8.1cmを測る。

白磁碗(7) 高合部のみ出土した。口縁部を断面三角形に折り曲げる器型の底部で、見込み一条の沈線めぐるす。内面に緑味をおびた灰白色の釉を施し、残存部外面には施釉されていない。胎土は灰白色である。

SK045 出土土器(第4図8-16)

SK045 からは土師器の杯が3-4個づつ重ねて置かれた状態で出土した。いずれも口縁部ないし内底部に油煙の付着がみられ、灯火器として用いられている。

杯(8-15) 口径11.4-13.4cm, 器高2.5-3.7cmを測る。調整はヨコナデを基とする。砂粒の少ない胎土を軟質に焼成し、色調は乳黄色系のものである。

(2) 瓦類

第5次調査で出土した瓦は、軒丸瓦7点(第17図1・2・4, 第16図5)4種, 軒平瓦8点(第19図1・5, 第20図6, 第16図6)4種, 文字瓦2点(第22図2・21)と若干の丸・平瓦である。これらは溝中から出土したものである。

Ⅲ 第6次調査

1 調査の経過

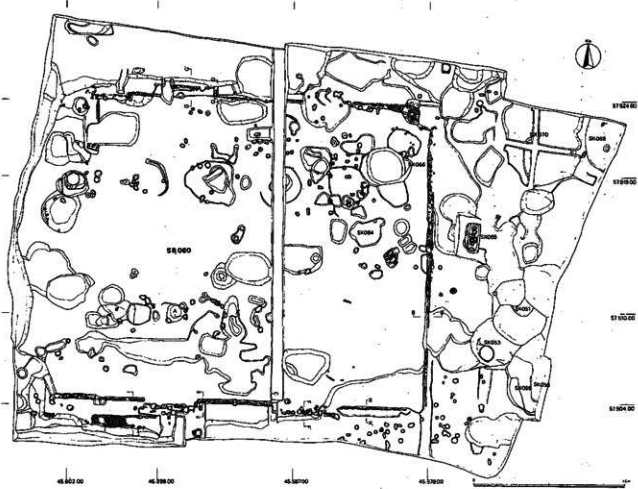
本次調査は講堂跡および回廊跡の規模および構造の解明を目的とした調査である。講堂跡については前述したごとく、昭和35年に一部発掘調査を実施し、その大方の位置について想定できていたので、基礎が残存していると考えられる部分を全て発掘することにした。その結果基壇西端部分は後世の削平により遺存しなかったが、東辺、南辺、北辺を把握することができた。回廊跡については昭和51年に一部発掘調査を実施していたが、いま一つその位置および規模を確定しえなかったため、再度発掘調査を行うことにした。その結果、従前の調査結果とは相違した位置にその遺構が考えられるにいたり、また回廊は金堂に接続することが判明した。調査は昭和52年11月19日から昭和53年1月19日まで実施した。地番は太宰府町大字国分字川添639-653, 字堀田655-701-3である。

2 検出遺構

(1) 講堂跡

金堂跡北約47mの地点に講堂跡がある。地形は東から西に傾斜しているため、基壇積土は東側部分が薄く、西側部分が厚い。また、基壇を改めていることから大きくⅡ時期に分けられる。

图5 第6次调查时麻林配置图



Ⅰ期 講堂平面は基壇上部が大きく削平されているため定かでないが、階段の幅および礎石根石下に配された環状の配石から7×4間四面庇と考えられ柱間の数値は身舎部分では4.5m等間と考えられたが、底部分に関しては明らかにしえなかった。礎石は原位置を保っているものは1個もない。しかし、基壇上およびその周辺に残っている礎石は全て花崗岩で円形の柱座を造り出している。

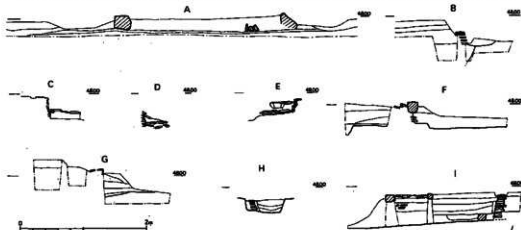
基壇の東西幅は西側部分がカットされているため直接知り得ないが、基壇南辺中央階段および北辺階段の心線を結んだ線を折り返すと約34.0mに復元できる。東・南・北で検出した基壇化粧は全て縄目の叩きで、黒色の瓦を使用している。基壇東南辺部分では地山が高いため、まず幅約0.6mの溝を掘り瓦を積み上げた後にその溝を中位まで埋めている。また他の部分は一担、全体を平坦にするために整地した後に瓦を積んでいる。また、溝を掘って瓦を埋め込むかわりにその外側を2〜3段分の高さまで整地して埋め込み、基壇の崩れを防いでいるようである。

階段は基壇南辺に3基、北辺に1基付設している。南辺東の階段は幅約4.5m、奥行約0.45m、中央のそれでは幅約4.45m、奥行約0.5m、西では階段の一端が知れるのみでその規模は知りえなかった。北辺の階段は中央のみにあり、幅は約4.5m、奥行約0.55mを測る。建立当初の階段は基壇化粧と同様にいずれも瓦を用いて構築している。また、南側の階段は後に花崗岩の自然石を用いて造り直している。北側の階段も同様に改修している可能性がある。

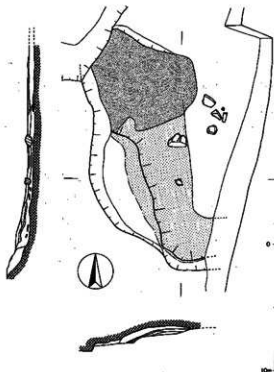
Ⅱ期 Ⅰ期講堂基壇を南に約1.8mずらしている。この移りのため南側の階段は3基ともに拡張基壇中に埋没している。Ⅱ期基壇整地層上に幅約0.75mの石敷列がⅠ期基壇端から約1.4mの地点に1条東西に走っている。Ⅱ期遺構はこの石敷列のみで、他の平面規模や基壇化粧等一切不明である。

(2) 土壇およびその他の遺構

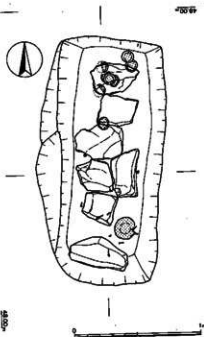
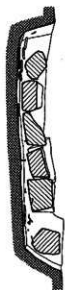
講堂跡地域(K地区)の調査では多数の土壇を検出した。土壇は古代と中世より以降のⅡ時



第6図 SB060 土層図



第7図 S X 055実測図



第8図 S X 065実測図

期に分かれ、中世以降のそれは調査地域全域で発見された。また古代に属する土坑は当然にして基壇上では発見されず、基壇東側で多く検出した。この項では顕著な遺構のみを紹介する。

S X 055 発掘区東端で検出した土師器窯状の遺構である。遺構の大半がS K 056により削平され、また北端部は近代の溝により削除されているためその形状を詳らかにしえないが、残存部から長円球半截形に復元できそうである。まず坑を2段掘りし、2段目の斜面に瓦混りの茶色土を置き、次いで火熱を加えている。この火熱により厚さ3~5cm程度の焼土面が生じ、その上に木炭や草灰が一面に残存していた。この焼土面の北に接して厚さ5~10cmの灰層があり、この灰層中から多数の土師器片が出土した。この焼土面および灰層から土師窯ではないかと推定されるが灰層中からわずかながらフイゴの羽口や黒色土器片が出土したことから、土師器窯であると即断はできない。もし、土師器窯であるとすれば、壁体の落下がみられなかったことからオープンカット的な構造が考えられる。

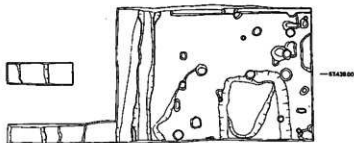
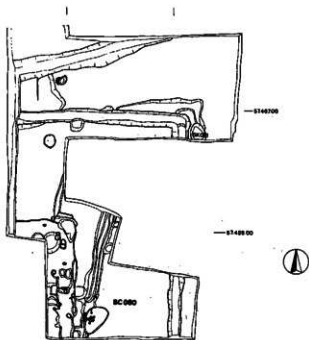
S X 065 S B 060の東辺中央部のすぐ東側で検出した遺構である。鉄釘および鉄釘に付着した木質から、この遺構は木棺墓と推定された。長軸を略南北にとり、幅約0.85m、長さ約2.0m、深さ約0.3mの掘り方の中に木棺を入れ、その上に0.25m~0.50m大の花崗岩の自然石を規則正しく長軸に沿って列べている。この石列は中央部が最も低く、両端が高

く弓なり状になっていることから、木棺の棺材が朽ちた後に徐々に落下したものと考えられる。出土した遺物は杯1、小皿8であり確実に棺内と考えられるのは釘の出土状態から、堀内南端で出土した杯のみである。しかし小皿も床面かもしくは若干浮いているのみであることから、それも棺内に置かれていたものと考えられる。

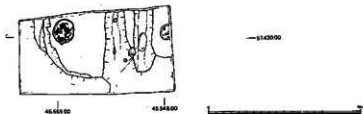
S X 070 発掘区東北部で検出した焼土および炭化物を整理した遺構である。後述するようにその中から出土した土器、瓦等から11世紀後半頃のものと考えられる。

(3) 回廊跡

昭和50年度に検出し、回廊跡とした遺構の確認とそれがどのように配されるのかを解決するために調査を実施した。まずH・I・J地区に各各トレンチを設定した。その結果H地区南端のトレンチで幅約1.0mの溝を、H地区北端のトレンチで東西に走る溝を発見した。この溝が一連の溝である



第9図 第6次調査回廊跡配置図



可能性があるため、H地区のトレンチを拡張した。その結果両溝は塔の北30.0m、東22.8mの地点で直角に接していた。このことからこの溝は金堂に接続する回廊の雨落ち溝との想定が可能となった。次いで、その溝の外側部分を回廊とするか、内側をそれとするか問題が生じてきた。まず外側とするとH地区南端トレンチ内には何もその痕跡がなく、溝のコーナー部分の外側に奈良時代と考えられる瓦甃（SK081）があり、更に昭和49年に実施した金堂北西部分には回廊の痕跡がなかったことから、外側に回廊を想定するのは困難である。つぎに内側に回廊を求めると、H地区北側のトレンチ内で溝から約6.0mの部分に直交する落ちを検出した。この落ちを追求すると幅約1.0mの浅い溝状遺構の一部を検出でき、これを回廊の内側の雨落ち溝として推定せざるをえない。しかし基壇そのものが発見されなかったことから確定は困難である。だが、地形が東北から南北に傾斜していることを考慮に入れると外側に大溝を掘り、内側に浅い溝を設けることは合理的であり、それを示すように外側の溝は奈良時代後半に埋まっていることが出土遺物から判明している。いうまでもなく、遺構の上部は大きく削平しているので、この外側の溝の上部は回廊が存していた時期には溝として機能していたであろうことは想像に難くない。

3 出土遺物

(1) 土器

SB060 出土土器（第10図1-17、表）

I期講堂跡からは土器は出土しなかった。II期講堂跡の整地層中から少数ではあるが土師器および須恵器が出土した。

須恵器

杯（12・15・16）底部の外縁よりも内側に低い高台を貼付したものである。12は南辺中央階段（花崗岩を使用した時期）中から出土した。15・16は基壇の北側の黄色土層から出土した。

蓋（13・14）13はボタン状のつまみを有し、口縁部は断面三角形を呈する。若干屈曲した緑部の外面に重ね焼きの跡と考えられる色調の変化がある。14は最大径が口縁端部にあるものである。13・14ともに15・16と同層位出土のものである。

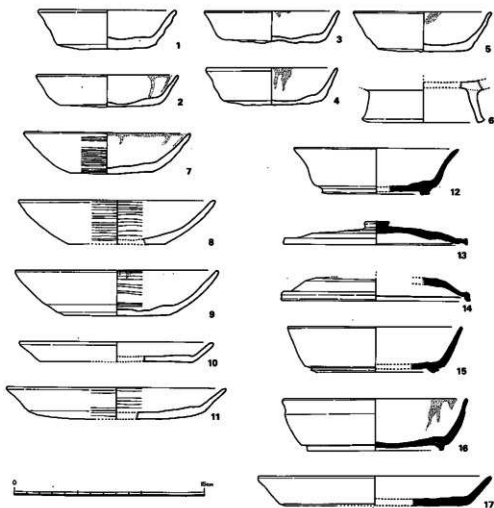
皿（17）II期講堂整地層中から出土した。外底部はヘラ切りの後にナデ仕上げしている。

土師器

ヘラミガキするものとしめないものがあるので、前者をb、後者をaとして記述する。

杯a（1-5）口径10.5cm-11.2cm、器高2.5-3.2cmを測る。平安・鎌倉時代に普遍的にみられる内底のナデ仕上げ、外底の板状瓦痕はない。胎土中の砂粒は少なく、赤褐色に焼成されている。全てII期講堂整地層からの出土である。

杯b（7-9）平坦な底部から若干丸味をもって大きく外上方に開く器型で、底部はヘラ削りし、体部との境いを明確にする。外底部を除き全てヘラミガキを施す。いずれもII期講堂



第10図 SB060出土土器実測図

整地層から出土した。

皿b (10・11) 須恵器の皿と同様な器型のもので、内外の器面をヘラミガキしている。Ⅱ期講堂整地層からの出土である。

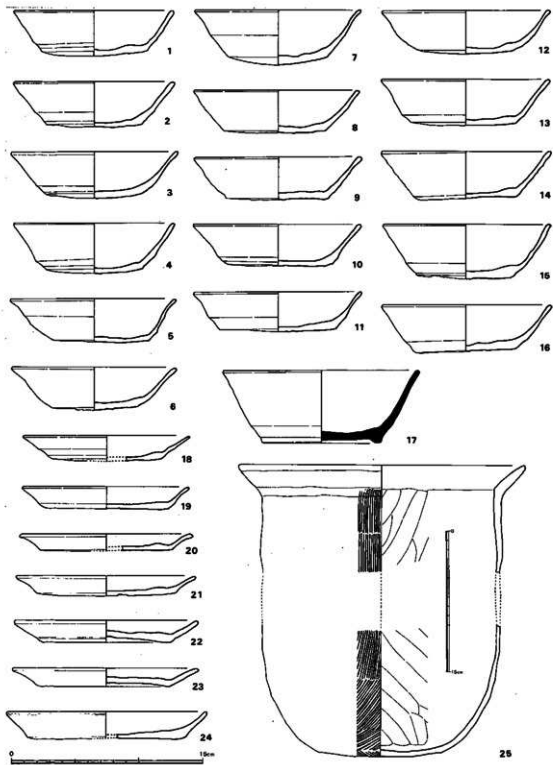
SK053 出土土器 (第11図1～25, 表) この土坑から、須恵器高台付杯および土師杯皿がほぼ完形のまま出土した。

須恵器

杯 (17) 体部は直線的に外上方に延び、高台は底部周縁に接して貼付される器型である。焼成は軟質で灰白色を呈し、一部黒化している。

土師器

杯 (1～16) 口径12.6～13.5cm, 器高3.1～4.4cmを測る。全て灯火器として使用されたも



第11图 SK053出土土器实测图

ので、体部内面に油煙が付着している。

皿(18-24) 胎土中の砂粒は少なく、暗赤色に焼成された皿である。全て灯火器として使用されている。

甕(25) 口縁部と底部の大部分は出土したが胴部の中位の破片が少なく直接接続しなため推定復元した。口縁部は「く」字状に外へ開き、胴部は張りのない器型である。口縁部は内外面ともにヨコナデ、外面を刷毛目、内面をヘラ削りしている。砂粒の多い胎土で焼成は甕としては堅い。

その他の遺構出土土器(第12図1-35,表)

SX055と056は切りあいある土坑であるが、近接した時期が考えられるため一括して報告する。

SX055・SK056出土土器(第12図1-8)

土師器

杯(1・2) 1はSK056, 2はSX055の灰層中から出土したものである。

皿(3・4) 通例の皿形のものに高台を貼付したもので、3はSX055, 4はSK056から出土した。托かとも考えられる。

碗(5-7) 5はSX055, 6・7はSK056から出土した。

甕(8) 口縁を「く」状に折り曲げ、胴部は張りのない器型である。口縁部と胴部のさかいは内外ともに稜線を有する。

SK059 出土土器(第12図9-16)

土師器

杯(9-13) 口径10.8-12.1cm, 器高1.7-2.4cmを測る。

碗(14-16) 口縁部と体部との境いは、屈曲により明瞭になる。

土師器以外に糸切り底を有する須恵器が出土したが小片のため図示できなかった。無高台の杯で、体部は外上方へ直線的に延びる器型と考えられる。九州以外の生産のものと考えられる。

SK051 出土土器(第12図17-22)

土師器

小皿(17-19) 口径10.5-11.4cm, 器高1.5-1.6cmを測る。

杯(21) 口径11.6cm, 器高3.1cmを測る。

黒色土器

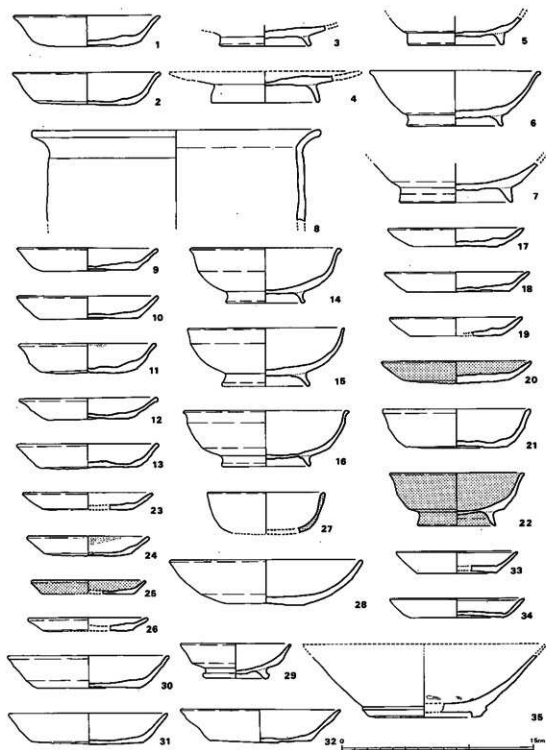
小皿(20) 口径11.9cm, 器高1.8cmを測り、内外面ともにヘラミガキを施している。

小碗(22) 口径10.6cmの小碗で、体部内外面とヘラミガキしている。

SX070 出土土器(第12図23-28)

土師器

小皿(23・24・26) 口径9.4-10.2cm, 器高1.1-1.6cmを測る。



第12図 その他の遺構出土土器実測図

丸底の杯(28) 口径15.2cm, 器高3.6cmを測り, 内面のみヘラミガキを施したものである。
黑色土器

小皿(25) 焼しが深く器内内部まで黒化しているので黑色土器としたが, その分量から瓦器小皿としたほうがよいかも知れない。

瓦器

小杯(27) 内外面ともに丁寧にヘラミガキされたものである。

SK069 出土土器 (第12図29)

土師器

小碗(29) 体部中位で屈曲した器型で, 内面をヘラミガキ仕上げしている。

SK064 出土土器 (第12図30-32)

土師器

杯(30-32) 口径12.5-12.8cm, 器高2.5-2.7cmを測る。底部は糸切りである。

陶磁器

白磁皿(33・34) いわゆる口売げの皿で, 体部内外面を全面施釉したものである。

青磁碗(35) オリーブ色を呈した釉が全体にかけられた越州窯系の青磁である。

SX065 出土土器 (第13図1-9, 表)

土師器

小皿(1-8) 口径8.1-8.7, 器高0.9-1.1cmを測る。全て糸切りである。

杯(9) 口径13.3cm, 器高2.6cmを測る。

底部切り難しは糸切りである。



第13図 SX065出土土器実測図

SC080 出土土器 (第14図1・2, 表)

須志器

皿(1・2) 回廊の外側の溝から出土した。いずれも灰色で, 焼成は硬い。

SK081 出土土器 (第14図3, 表)

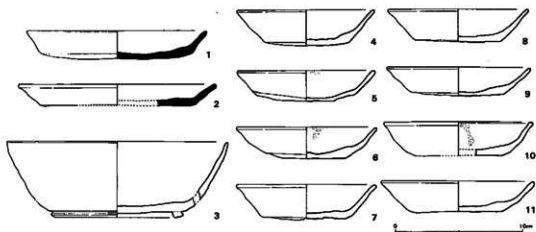
土師器

碗(3) 平坦にヘラ削りされた底部と口縁部との境は明瞭で, その内側に低い高台が貼付される。口縁部は内外ともヘラミガキが施される。

茶色土層出土土器 (第14図4-10, 第15図, 表)

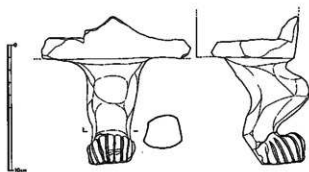
土師器

杯(4-11) 数枚づつ重ね, 伏せて置かれた状態で出土した。いずれも口縁部に油煙の付着が認められる。



第14図 SC080・SK081・茶色土属出土土器実測図

獣脚(第15図) 黄赤色を呈した。高さ8.4cmの獣脚で、1脚のみ遺存していた。上にある器の大部分は欠失しているためその器型は定かでないが、底部は円形を呈し、径約15.5cmを圍り、体部は直上へ延びることから香炉状のものが考えられる。器面はヘラで面取りし丁寧である。



第15図 獣脚 実測図

(2) 瓦類

第6次調査で出土した瓦は、軒丸瓦、軒平瓦、文字瓦、鬼瓦、埴、面戸瓦、契斗瓦、隅木蓋瓦と多量の丸・平瓦である。これらは攪乱土および瓦溜り等から出土したものが多い。現在整理中であるが、特に土師器と伴出した遺構出土の瓦を中心に以下要点を述べる。

軒丸瓦(第17図1~4、第18図5~8、第16図1~5) 今回の調査で出土した軒丸瓦の点数はK地区で114点13種、G・H・I地区で51点3種に分類できる。出土率は第17図1(22%)4(16.6%)、第18図5(13%)、第17図2(11%)で他は10%以下である。これはG・H・I地区でも同じ傾向がみられる。

このなかで第17図4はSK053から土師器と共に出土した。これは大宰府政庁南門跡基壇下の瓦溜りから「安楽之寺」銘瓦と伴出しており、その下限の時期を10世紀前半頃に求められる。しかし後述するSK053共伴の土師器は器型ないし法量等から8世紀末~9世紀初頭頃に考えられ、又この瓦が文様構成、技法の面からも古い要素が認められることなどを勘案すると、奈良時代後半頃に遡らせることが考えられる。今回13種類の瓦が出土したが、第17図3、第18図7・8をのぞいては大宰府政庁、観世音寺等から出土しており、第18図5・6はその下

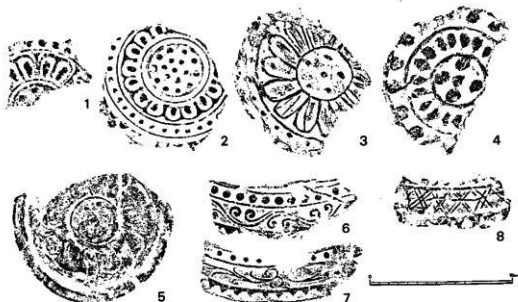
限時期を10世紀前半頃に考えられるものである。

軒平瓦（第19図1～5、第20図6～10、第16図6～8） 軒平瓦の出土数はK地区で135点13種、G、H、I地区で46点7種である。出土率は第19図1（25%）次いで第20図9（16%）、10（12%）で他は少数である。これらの特徴をみると第19図1～5は段頸で古い要素を具えており、第20図6～10は曲線頸で、胎土も荒く平瓦凸面は斜格子目の叩きが認められ、前者より新しい傾向がうかがえる。

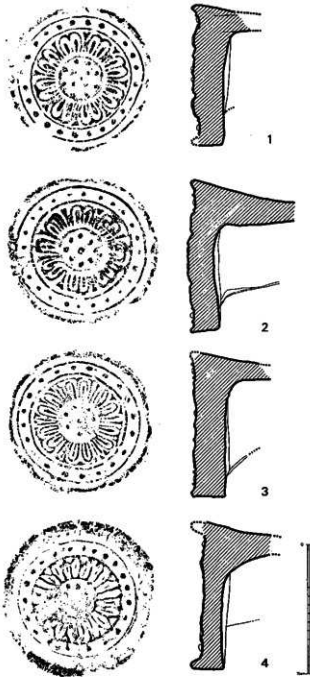
S K 056 から第19図1・2・4・5が出土した。4は段頸でへら削り成形をしており、5は細目の叩きで段頸を有する。いずれも技法的に古い要素を具えているが、時期を求めるには現在のところ困難である。しかしながらこれらの瓦と伴出した土師器は、後述するように10世紀前半頃に求められ、また文様構成、技法上からその製作年代下限を10世紀前半以前に求めることができる。

S X 055 出土の瓦、第19図3・5、第16図8は軒丸瓦との伴出はなく、なかでも8が最も新しいものと考えられる。これについては、これから出土した土師器は大宰府出土土師の握年輪から9世紀末～10世紀初頭頃に求められ、又平瓦凸面に第22図17および「賀茂瓦」銘の文字があり、加えて瓦当面と平瓦凸面の二重斜格子の文様構成も類似している。因みに政庁南門跡瓦溜から出土していることを合せると9世紀代に遡らせることができる。

文字瓦（第22図1～25） 文字瓦の出土数は総計202点で、1～5「平井」5種、6～11「佐」6種、12～14「賀茂」3種、15～17「筑・前」3種に分かれ、18～25「小口瓦、介、未、太、因、四王」銘等が出土した。22、25は不明である。



第16図 軒先瓦拓影



第17図 軒丸瓦拓影・実測図

1 複井八弁蓮華文

瓦当一径16.5cm, 厚さ3.2cm, 内区中房径5.5cm, 蓮子1+4+8, 弁区幅-2.9cm, 外区内縁幅-1.4cm (珠文24), 外縁幅-1.3cm, 黒色, 胎土砂粒含む, 焼成は軟質, SK051・052出土。SB060 南辺瓦積基壇の南側整地層出土。

2 複井八弁蓮華文

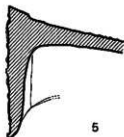
瓦当一径17.6cm, 厚さ3.1cm, 内区中房径5.7cm, 蓮子1+8, 弁区幅-2.8cm, 外区内縁幅1.6cm (珠文24), 外縁幅1.8cm, 黒灰色, 弁は8個で構成されているが, 1弁のみ単弁である。SK053・059出土。

3 複井六弁蓮華文

瓦当一径16.8cm, 厚さ3.6cm, 内区中房径4.8cm, 蓮子1+7, 弁区幅-3.1cm, 外区内縁幅1.5cm (珠文20), 外縁幅1.6cm, 灰白色, 胎土砂粒含む, 焼成は硬質。

4 細単弁二一弁蓮華文

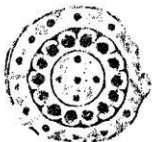
瓦当一径17.1cm, 厚さ3.5cm, 内区中房径4.5cm, 蓮子1+6, 弁区幅3.0cm, 外区内縁幅1.6cm (珠文21), 外縁幅1.7cm, 淡赤褐色, 胎土砂粒含む, 焼成軟質, SK052・053・059出土。



5 複弁六弁蓮華文

瓦当一径15.2cm, 厚さ2.4cm, 内区中房径5.0cm, 蓮子1+6, 弁区幅—2.9cm, 外区幅—1.4cm (珠文26), 灰色, 胎土砂粒多く含む, 丸瓦凸面は斜格子目の叩き。SK052出土。

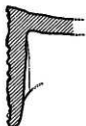
5



6 単弁一四弁蓮華文

瓦当一径15.7cm, 厚さ3.6cm, 内区中房径6.2cm, 蓮子1+4, 弁区幅2.5cm, 外区幅—2.3cm (珠文13), 黄灰色, 胎土砂粒多く含む, 焼成は軟質。SK059, SX070出土。

6



7 単弁一二弁蓮華文

瓦当一径14.0cm, 厚さ2.1cm, 内区中房径3.4cm, 蓮子1+4, 弁区幅3.3cm, 外区内縁幅1.0cm (珠文23), 外縁幅0.6—0.8cm, 暗灰色, 胎土砂粒多く含む, 焼成は硬質。SK054出土。

7

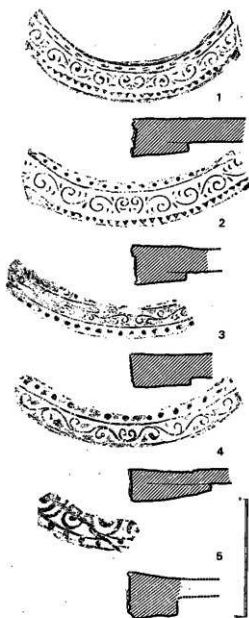


8 単弁八弁蓮華文

瓦当一径約16.7cm, 厚さ2.2cm, 内区中房径7.3cm, 蓮子1+6, 弁区幅2.6cm, 外縁幅2.1cm, 灰色, 胎土砂粒含む, 焼成は軟質。

8

第18図 軒丸瓦拓影・実測図



第19図 軒平瓦拓影・実測図

1 均正唐草文

瓦当厚 4.7cm, 上弦幅 24.2cm, 下弦幅 26.1cm, 弧深 7.1cm, 段頸, 上外区珠文15, 下外区凸鑑歯文29, 黑色, 胎土砂粒含む。S K 052・053・056出土。

2 均正唐草文

瓦当厚 5.2cm, 上弦幅 25.6cm, 下弦幅 約 29.0cm, 弧深 4.4cm, 段頸, 上外区珠文17, 下外区凸鑑歯文31, 黑色, 胎土砂粒含む, 焼成軟質。S K 053・056出土。

3 均正唐草文

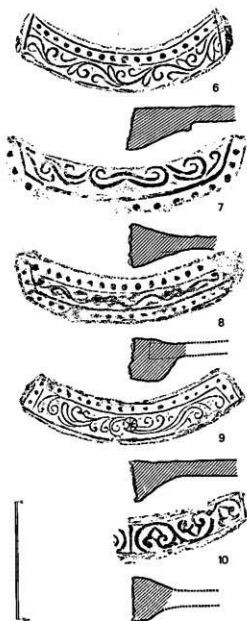
瓦当厚 4.4cm, 上外区珠文, 下外区珠文, 段頸, 淡茶色, 胎土砂粒含む, 焼成軟質。S K 052・S X 055出土。

4 均正唐草文

瓦当厚 4.2cm, 上弦幅 26.4cm, 下弦幅 28.7cm, 弧深 5.0cm, 段頸, 上外区珠文14, 黄灰色, 胎土砂粒含む, 頸部はヘラケズリ。S K 056出土。

5 偏行唐草文

瓦当厚 5.0cm, 下外区珠文, 段頸, 灰白色, 胎土砂粒多く含む, 焼成は軟質, 瓦当面に范割れの痕が認められる。S X 055・S K 056出土。



第20図 軒平瓦拓影・実測図

6 異行唐草文

瓦当厚 5.3cm, 上弦幅 23.4cm, 下弦幅 27.0cm, 弧深 4.9cm, 段頸, 上外区珠文17, 暗灰色, 胎土砂粒多く含む, 焼成は硬質, 平瓦凸面は格子目の叩き。

7 均正唐草文

瓦当厚 5.7cm, 上弦幅 30.0cm, 下弦幅 28.0cm, 弧深 4.0cm, 曲線頸, 下外区珠文11, 脇区珠文3, 黄灰色, 胎土砂粒多く含む, 焼成軟質, 平瓦凸面に「佐」銘の文字が認められる。

8 唐草文

瓦当厚 5.3cm, 上弦幅 28.3cm, 下弦幅 26.0cm, 弧深 4.0cm, 曲線頸, 上外区珠文17, 下外区珠文18, 脇区珠文3, 黄灰色, 胎土砂粒多く含む, 焼成軟質, 瓦当は3単位の唐草で構成。

9 均正唐草文

瓦当厚 5.3cm, 上弦幅 22.7cm, 下弦幅 28.6cm, 弧深 4.0cm, 曲線頸, 上外区珠文17, 脇区珠文2, 灰白色, 胎土砂粒多く含む, 焼成硬質, 平瓦凸面は格子目の叩き。SK052・054出土。

10 均正唐草文

瓦当厚 5.6cm, 曲線頸, 暗灰色, 胎土砂粒多く含む, 焼成は硬質。SK054・069出土。

このうち19は出土数が極めて多く、全体の64.1%を占め、他は1～6点の出土である。出土した主な遺構はS K053, 056, S X055があり、1, 3, 7, 8, 12, 15, 16, 17, 19, 23, 24がある。このうち7, 8, 12, 15は大宰府政庁南門跡の瓦溜り⁽¹⁾で出土しており、又S X055出土土師器の時期を勘案すると、これらは10世紀前半頃に考えられる。しかし、S K053出土の19は出土土師器ないし軒先瓦等から、それを奈良時代末頃に求めることができ、特徴として格子目が細く胎土は精製されている。よって全体的に格子目の大きいものと小さいものが認められるが、後者は10世紀前半をさかのぼる可能性が考えられよう。

鬼瓦 (図版15-1) 13点出土した。いずれも小片で遺存状態が悪い。鬼面は目より上方が残り、現存する下部幅27.2cm、上部25.6cmで外縁は珠文である。彫間上部には鉄錆が前面と背面の同位置に付着している。胎土は砂粒が多く含み、灰白色で焼成は軟質である。

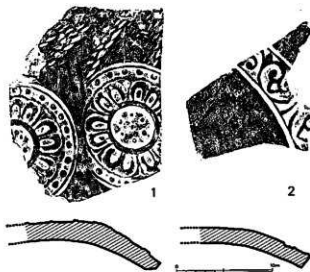
埴 6点出土した。すべて破片で長方形の無文埴である。厚さ6cmで胎土は荒く焼成は軟質である。

面戸瓦 (図版15-3) 総計6点出土した。凸面は細目の叩きを擦消したもので、側面は丁寧にへうで成形している。黒色および黒灰色を呈している。

熨斗瓦 (図版15-4) 6点出土した。幅10.4cm～13cmのもので、凸面は細目の叩きで全体に黒色である。側面はへうで成形している。

隅木蓋瓦 (図版15-2) 隅木の上面を覆う蓋瓦で、蓋板の尻部(直角三角形をなす隅角)の破片である。長さ、幅は不明であるが、隅木を狭む側板は幅3.2cm、高さ2.6cmを測る。全体に黒色である。

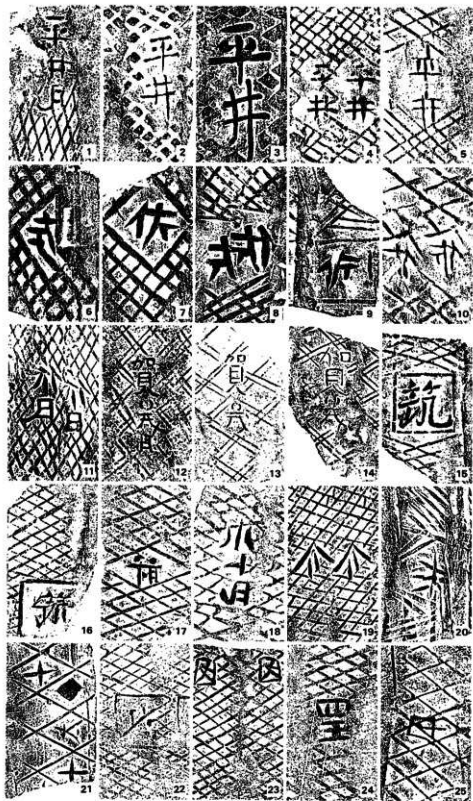
平瓦 (第21図1・2) 1・2は平瓦凸面に複弁八弁蓮華文と均正唐草文の叩きがあり、S K057で1(27点)、2(2点)、その他3点の計32点が出土した。これらは第18図-5、第20図-10と同じものである。



第21図 平瓦拓影・実測図

註

- 福岡県教育委員会「大宰府史跡」1969 藤井功「大宰府史跡の調査について」『西日本文化』第60号 1970
- 横田寛次郎・森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」『九州歴史資料館 研究論集2』1976
- 註(1)と同じ
- 註(1)と同じ



第 22 图 文字瓦拓影

(3) 土製如来形仏像頭部残欠 (図版 15-5)

金堂の東にとりつく回廊が南に折れるあたりの北側 (I 地区, 茶色土層) から出土した。この頭部残欠は後頭部及び鼻、口部周辺、顎を欠失している、現状寸法では、頂一頸9.8cm、面長5.3cm (いずれも頸部欠失)、面幅5.1cm、内髻部径5.7cm、地髪部幅 (頭幅、耳張) 7.4cm 面奥5.5cm (鼻部、後頭部欠) を測る。

後頭部との割離面中央に浅い穴があり、後頭部から外へでて頭光への支えが想定され、首部にもそれよりやや小さな穴があり、塑形時の体部との連接軸痕跡と思われる。

花崗岩粒を含む粘土を形成して焼いた土師質のもので、頭髮部は髻髪をつくらず平滑にし、内髻部の盛り上げは2.0cmほどで、頭部全体からみて高くもなく低くもない。髮際線はほぼ直線を示し、両耳部あたりでは耳を覆うかのごとくで、耳の表現は省略されている。両眼の上下の臉ははれぼったく、古様をみせているが、鼻、口部を欠失しているので特徴をつかみにくい。

強いて言えば、上下の臉に平安前期的な古様を見うるが、当地では平安後期まで踏襲されるものであり、またこの種のものは通常の様式判断になじみにくいものが多く、古代いっばいを考えておくべきであろう。

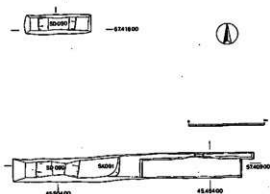
それ故、発掘地層及び伴出品による判断に俟つところが多く、伴出土器類の多くが平安前期とされていることを付記しておく。

頭部残欠だけなので、全容をはかりかねるが、いわゆる場仏ではなく、播磨国極楽寺経塚出土の土製仏像<康治2年、天養元年 (11, 43, 44) 常福寺藏>のようなものが想定されよう。九州地区でのこのような土製の仏像の出土は珍しい。

IV 第7次調査

1 調査の経過

水田を宅地にするとの届出にもとずき、事前に発掘調査を実施した。対象地域が園分寺中軸線から約1町隔てた地域にあたるため、寺域を面する遺構の存在が考えられ、その検出を主たる目的とした。まず中央に東西とレンチを1本設定したところ中軸線から約320尺の地点で溝状の落ちが検出された。そこで確認のため北側にもう1本トレンチを設定した。その結果略中軸線と平行な溝であることが判明した。発掘



第23図 第7次調査遺構配置図

調査は昭和52年12月9・10日の両日実施した。地番は太宰府町大字国分字堀田702-5である。

2 検出遺構

検出した主要な遺構は土坑と溝である。

(1) 溝

SD090 幅約2.8cm、深さ約0.6cmを測る南北溝である。出土した遺物は全て奈良時代のものである。

(2) 土坑

SK091 SD090の東肩部分を切って掘られた土坑で、その大きさについてはトレンチ調査であったため明らかでない。

3 出土遺物

(1) 土器

SD090 出土土器(第24図1, 2)

土師器

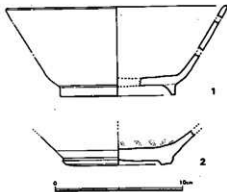
有高合杯(1) 図上復元を行った。底部と体部の境にスマートな高台を貼付し、ヘラミガキ仕上げをしている。胎土は精良で、焼成は硬めである。

陶磁器

青磁(2) 越州窯系青磁碗である。釉はうぐいす色を呈し全体に施している。

(2) 瓦類

SD090 で出土した瓦は比較的少なく、軒先瓦は出土しなかった。丸瓦は玉縁付で凸面は縄目を擦消している。平瓦の凸面は縄目の印きで、凹面は細い布目痕である。胎土は砂粒が含み灰白色ないし黒灰色で焼成は軟質である。丸・平瓦共に側面はヘラで成形しており、極巻き造りである。これらは胎土、焼成、色調など第17図1・2、第19図1・2に類し、古い要素がうかがえる。



第24図 SD090出土土器実測図

V 筑前国分寺に関する一史料

保安2年(1121)に87才で薨じた土御門左大臣源俊房の日記である「水左記」には、中間に4年間分の散逸は見られるが、康平5年(1062)から応徳3年(1086)に至るまでの約半世紀間のことが記録され、その承暦4年(1080)8月14日条には、「(前略)、筑前守章家申国分寺講堂造進事、仰、令新□□、(後略)」という一節が見られる。

この国分寺がいずれの国の国分寺であるかは必ずしも明らかではないが、既に竹内理三・堀池春峰氏などによって筑前国分寺と解されている。両氏ともその根拠についてはとくに明示されていないが、章家が前筑前守である点を考慮されたものと推察される。とすれば、この一節は、単に当代における筑前国分寺の現状を示すというにとどまらず、筑前国分寺そのものの歴史を考える上においても注目すべきものであり、以下これについて若干述べてみよう。

まず、章家について見てみよう。「尊卑分脈」によると、彼は藤原姓で、奈良朝末期の左大臣藤原魚名の9世孫にあたり、春宮少進を歴任しているが、従五位下筑前守が極位極官であったと推定されるので、その点では典型的な受領階級であったといえる。彼の筑前守在任期間は明らかでないが、当代の歴代筑前守を見てみると、康平年間(1058-64)に藤原永親、治暦2年(1066)頃に橋義通、延久元年(1069)には大宰少貳を兼ねた源某(彼は同4年に前筑前守として見える源頼家であろう)、承暦2年に藤原某、同4年には大宰少貳を兼ねた平成季、そして前引のような前守章家などの名が見られる。前後の関係から見て、承暦2年の藤原某こそ章家ではないかと推定されるが、断定するに足る十分な根拠は見られない。しかしこのように推定すれば、承暦4年は彼が筑前守を離任してほど遠くない時期であり、在任中のことかどうかはともかく、彼が筑前国分寺講堂の再建に何らかの関係を有していたことを想定できる。

さて、この日、権大納言から正に転じた俊房のもとに頭弁藤原実政が持参した7枚の宣旨のうち1枚が前引のもので、後半部分が欠落してはいるが「令新□□」と述べられていることから見て、それは前筑前守章家が申請していた国分寺講堂の再建について認可したものと解される。とすれば、この当時は講堂が存在しなかったことを意味し、前章までに報告されているように、それは発掘調査の結果ともほぼ一致している。なお、これによって講堂が再建されたかどうかについては他に徴すべき史料も見られず、明らかではない。

同年9月には肥後国司が同国国分寺塔材木についての解状を進め、その塔が損壊していることを窺わしめるが、これに関連して前前司の不与解由状が勘申されており、かなり長期にわたって放置されていたと推定される。かかる例は他にも見られるところであり、国家仏教が衰退した当代における国分寺の地位を象徴している。筑前国分寺講堂の場合も例外ではなく、損壊の時期は明らかでないが、その後は放置され、ついには再建されなかったのではないだろうか。

註

竹内理三氏編『大宰府・太宰府天満宮史料 巻五』 承暦4年8月14日条頭註。

堀池春峰氏「国分寺の歴史」(『仏教芸術』103所収)

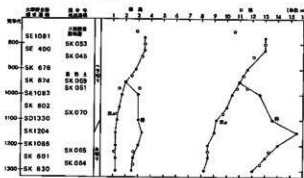
VI ま と め

以上52年度実施した5・6・7次の調査の結果明らかになったことを概略述べてきたが、これを要約すると以下のごとくなる。

土器 本年度の調査で多数の土器が出土したが、中でも注目を引くのはⅡ期講堂整地層出土の杯である。これらはその法量もさることながら、内底部をナデ仕上げせず、外底部に板状圧痕をもたないという特徴がある。この杯に伴ってヘラミガキ調整のある杯が出土しているが、これと同じものが大宰府史跡のSE400, SE1081, SK1084からも出土している。ところが、これらの遺構から出土する杯をみても、内底に仕上げナデがされ、外底に板状圧痕をもつものがあり、法量も大きい。次にSK053出土の杯についてみると、先の大宰府史跡の各遺構出土のものと同法量・同手法であるが、SK053からはヘラミガキのある土師器は出土していない。とすると、特徴ある杯は他の土師器にその手法がみられないことから、SK053より先行し、天平13年以降の間にその年代を求めることができる。また、この杯は先述の大宰府史跡各遺構の年代観及び、後述するSK053の年代観と照し合わせて、土師器の手法上の変化を考える上で一つの意味をもつと考える。

さて、ここで、他の土師器の年代観についてふれてみたい。

歴史時代土師器の編年的研究は御笠川南条坊の調査、大宰府史跡の調査により、それぞれ進められており、それらの成果によると口径、器高などに規則性のあることが認められている。ここではその成果に従い、各遺構出土の土師器を対比させて図示した。(第25図)なお、図のうち



第25図 口径・器高からみた杯・小皿の推移

ち大宰府史跡標式遺構については「研究論集4」による。

最後に、この年代に従って土器の出土量を見ると、須惠器は先述したⅡ期講堂整地層出土の杯に伴うものがあり、この時期に含まれる形態のものが今回出土した須惠器のほとんどを占める。一方、土師器は量的に10世紀代を頂点として出土し、SX070以降その量が激減する。そして再び量を増すのはSX065の段階からである。

Ⅷ 今回出土した軒先瓦、総計26種の組合せについて考えてみよう。まず第17図1と第19図1、第17図2と第19図2が考えられる。これらについては大宰府史跡の概報その他で論じているため、詳しくはそれにゆずるが、それによると出土状況、文様構成、技法上から前者は8

世紀初頭、後者は8世紀中葉に求められる。又第17図4と第19図3は政庁跡第6次(回廊西南隅)調査によって組合せが明らかになっており、今回それらの時期を奈良時代後半頃に与えることができた。また第17図3と第19図4、第18図5と第20図10が考えられる。前者ははっきりした根拠は持ち合せていないが、第17、19図1・2の系統を引くものと思われ、文様構成ないし製作技法の退化した点、又瓦層の出土状況などからこれらをセット関係と考えて誤りあるまい。後者は第21図1・2に示す丸・平瓦に押印しているもので、SK057からまともに出て出土した。しかし丸と平瓦の出土量に差があり、セット関係にするには若干の不安はあるが、胎土、焼成ならびに平瓦に軒丸・平瓦を施文するという類似した点からみて、この組合せが考えられる。

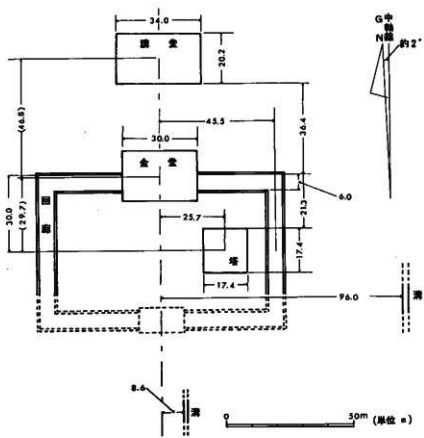
遺構 まず第1に、創建期講堂の規模を知りえたことである。東西約34.0m、南北約20.1mの基壇上に7×4間四面庇の建物が推知され、基壇南辺に3基、北辺に1基の階段が付設されていた。また、講堂は大きく2期に分かれ、出土遺物から奈良時代後半に基壇の造り替えが行なわれていることが明らかになった。また、昭和35年に検出した石敷列は、実はⅡ期の講堂に伴うものであることが把握できた。更に建立の時期は奈良時中頃に予想され、廃絶は遺物の出土が激減する11世紀後半頃に求めることができ、その廃絶の原因はSX070の焼土・炭化物から焼失したのではないかと予想される。この廃絶の時期については「水左記」にみられる史料からも補強される。

第2に回廊が金堂の前面に接続することを明らかにしえたことである。

第3に第7次調査で国分寺東限と考えられる溝SD090を検出し得たことである。このSD090の西岸は中軸線から320尺を測ることからこれを折り返して西側の地形をみると、現在南北の道路が1条走っており、この道路をさかいにして西側は段落ちになっていることから寺域東西幅は640尺と考えることが可能であり、また、南限は第5次調査により南北溝SD050の存在から、天満神社の南端あたりと考えられ、北限講堂の北約50mの地点が谷の南岸になることから、そこを北限とすることができる。このように考えると南北の幅は東西幅と同様に640尺になる。これらのことから略640尺の四方の寺域が想定できる。(各遺構の関係は第26図のごとくなる。)

注

- 1 前川威洋他『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集、第3集、第6集、第7集、1975～1977
- 2 横田寛次郎・森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」『九州歴史資料館 研究論集2』1976
- 3 同「大宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館 研究論集4』1977。
- 4 石松好雄・高橋章「大宰府出土の瓦について」『九州歴史資料館 研究論集2』1976。
- 5 『筑前国分寺一昭和51年度発掘調査概報一』福岡県教育委員会 1977。
- 6 註(1)に同じ。



第 26 圖 主要遺構配置圖

A	B	口径	底径	器高	C	D
第5次調査						
SD050						
杯						
1	1	10.0	6.8	2.7	○	○
2	2	11.7	7.6	2.6	○	
3	3	11.6	7.1	2.2	○	
4	4	11.7	7.7	2.3	○	○
小皿						
1	5	9.0	6.7	1.2	○	
SK045						
1	8	11.4	6.4	3.5		○
2	9	11.7	7.2	3.5	○	
3	10	12.0	8.0	3.4	○	
4	11	12.0	7.8	2.9	○	○
5	12	12.1	7.1	3.7	○	○
6	13	12.1	7.3	3.6		
7	14	12.3	7.6	3.6	○	○
8		12.3	9.0	2.5	○	○
9	15	13.4	8.1	3.6	○	○
第8次調査(講堂)						
Ⅱ期講堂盤地層						
杯 a						
1	4	10.5	7.8	3.0	×	×
2	3	10.7	7.5	2.5	×	×
3	5	10.9	7.4	3.2	×	×
4	1	10.95	7.9	3.2	×	×
5	2	11.2	7.8	2.6	×	×
杯 b						
1	7	13.2	6.5	3.3		
2	8	15.5	7.6	3.5		
3	9	16.0	8.3	3.6		
皿 b						
1	10	15.3	12.0	1.6		
2	11	17.3	14.0	2.5		
須恵器皿						
1	17	18.6	15.2	2.3	○	
黄色土						
須恵器杯						
1	15	13.9	3.7		○	
2	16	14.6	4.2		○	
須恵器蓋						
1	13	14.6	1.9			
2	14	15.0				

A	B	口径	底径	器高	C	D
SB060 (石積階段中)						
須恵器杯						
1	12	13.0		3.6	○	
SK053						
杯						
1	1	12.6	8.4	3.7	○	○
2		12.6		3.5		
3	2	12.7	7.6	3.6	○	×
4	3	13.0	7.7	3.7	○	
5	4	13.0	7.5	4.0	○	○
6		13.0		3.1		
7	5	13.1	7.6	3.4	○	
8	6	13.1	6.7	3.5	○	
9	7	13.1	7.8	4.4	○	
10		13.1	7.4	3.6	○	
11	8	13.2	8.0	3.3	○	○
12	9	13.2	8.1	3.4	○	
13	10	13.2	7.6	3.4	○	○
14	11	13.3	9.2	3.2	○	○
15	12	13.3	7.5	3.5	○	○
16	13	13.3	8.8	3.7	○	
17	14	13.3	7.5	3.8	○	×
18	15	13.3	7.6	4.4	○	○
19	16	13.5	7.8	3.8	○	○
皿						
1	18	13.2	8.6	2.1		
2	19	13.2	9.6	1.8	○	
3	20	13.6	10.4	1.4		
4		13.7	10.9	2.8	○	
5	21	14.2	11.0	1.6		○
6	22	14.6	10.0	1.8	○	○
7	23	14.7	10.1	1.4	○	○
8	24	15.4	12.5	2.1		
須恵器杯						
1	17	15.5		5.8		
SK056						
杯						
1	1	11.5	6.4	2.5	○	
碗						
1	6	13.5		4.4		○
SK055						
杯						
1	2	11.7	7.5	2.6	○	○

A 番号, B 挿図番号, C 内底のナデの有無, D 板状底の有無

A	B	口径	底径	器高	C	D
2		10.8	8.8	2.7		○
SK059						
杯						
1	9	10.8	7.0	1.8	○	○
2	11	10.8	7.5	2.4		○
3	12	10.9	6.4	1.7		○
4	13	11.4	8.0	2.0	○	
5	10	12.1	7.7	1.9	○	○
碗						
1	14	11.9		4.5	○	
2	15	12.3		4.7		
3	16	13.1		4.5		○
SK051						
小皿						
1	19	10.5	7.2	1.5	○	○
2	17	10.7	6.7	1.5	○	○
3	18	11.4	8.1	1.6	○	○
杯						
1	21	11.6	7.9	3.1		
黒色土器 (小皿)						
1	20	11.9	8.3	1.8		○
黒色土器 (小碗)						
1	22	10.6		4.3		
SK070						
小皿						
1	26	9.4	7.1	1.1	○	○
2	24	9.7	6.9	1.6	○	○
3	23	10.2	7.1	1.4	○	○
黒色土器 (小皿)						
1	25	9.0	7.1	1.1		
丸底の杯						
1	28	15.2		3.6		○
瓦器						
1	27	9.3		3.4		
SK080						
小碗						
1	29	8.7		2.8		
SK084						
杯						
1	31	12.5	8.8	2.5		
2	32	12.6	8.0	2.7		○
3	30	12.8	8.2	2.6		

A	B	口径	底径	器高	C	D
SK065						
小皿						
1	1	8.1	6.2	0.9	○	○
2	2	8.2	6.2	1.0	○	
3	3	8.3	6.9	1.1	○	○
4	4	8.4	6.6	0.9		○
5	5	8.6	7.1	0.9		○
6	6	8.6	6.3	1.1	○	○
7	7	8.7	6.8	1.0	○	○
8	8	8.7	6.8	1.1	○	○
杯						
1	9	13.3	8.8	2.6	○	○
第 8 次 調査 (回答)						
SK080						
須恵器 (皿)						
1	1	14.2	11.8	2.2		
2	2	15.7	11.4	1.6		
SK081						
杯						
1	3	17.5	10.8	6.1		
茶色土						
杯						
1	4	10.9	6.7	2.9	○	
2	5	11.0	8.0	2.4	○	○
3	7	11.1	6.6	2.7	○	○
4	6	11.1	6.6	2.5	○	
5	8	11.1	6.7	2.6	○	×
6	9	11.4	7.4	2.3	○	×
7	10	11.8	6.7	2.7	○	○
8	11	12.1	6.8	2.5	○	○
第 7 次 調査						
SD080						
杯						
1	1	17.5		7.1		

圖 版



筑前国分寺全景（南から）



筑前国分寺全景（北から）



(上) S D050 溝 (北から)
第 1 トレンチ
(下) S X047 (西から)





第5次調査 第2トレンチ全景(北から)



第2トレンチ検出溝

図版 4



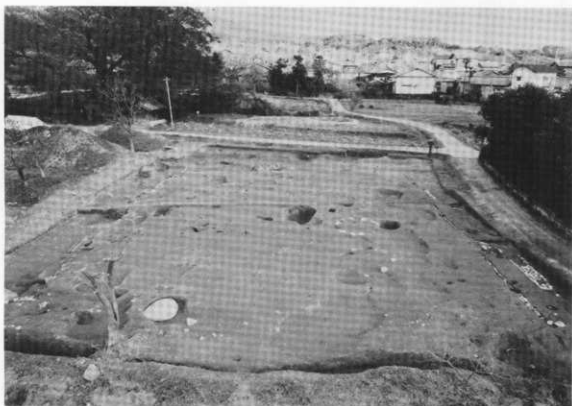
第6次調査区全景（北から）



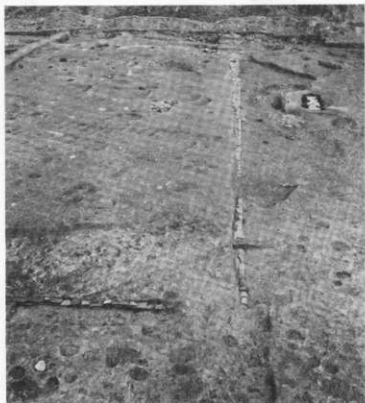
第6次調査区全景（北西から）



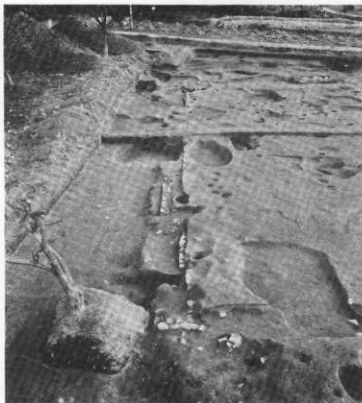
S B060 講堂跡全景（東から）



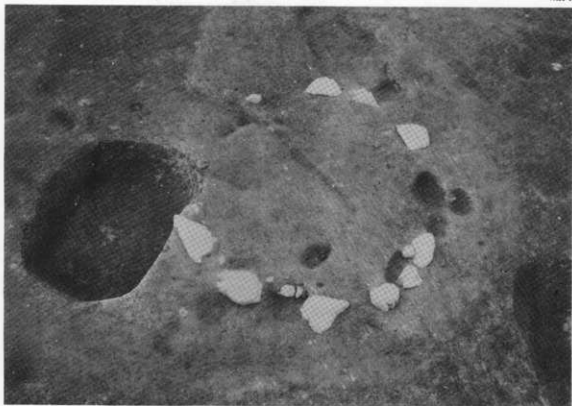
S B060 講堂跡全景（西から）



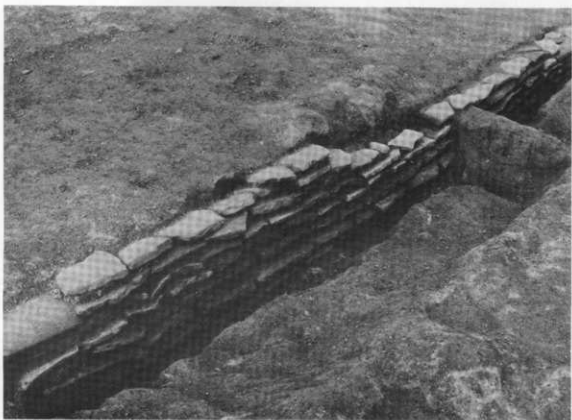
S B 060 東側基壇化粧（南から）



S B 060 北側基壇化粧（西から）



S B060 環状の配石（東から）



S B060 南側基壇化粧（南から）



S B060
南側東階段
(南から)

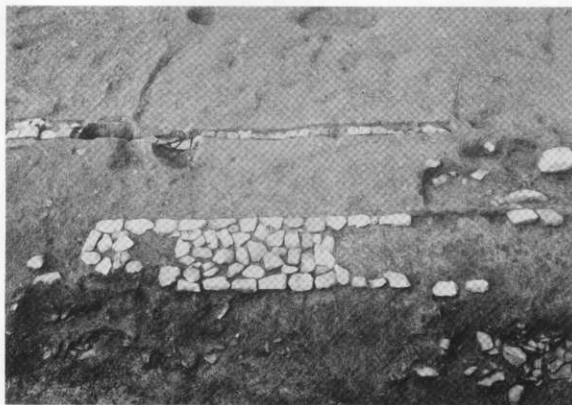
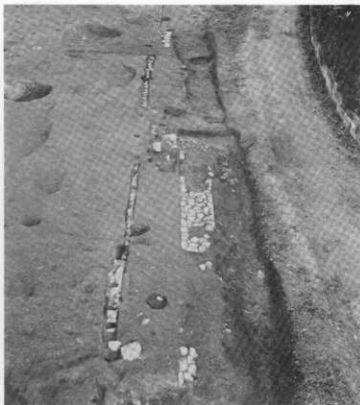


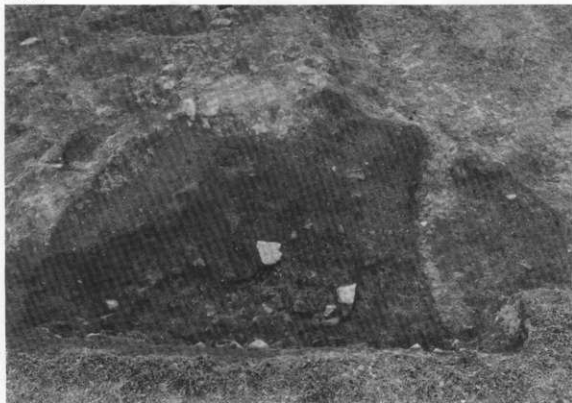
S B060
南側中央階段
(南から)



S B060
北側中央階段
(北から)

- (上) S B060 II期
基壇敷石列
(西から)
- (下) S B060 II期
基壇敷石列
(南から)

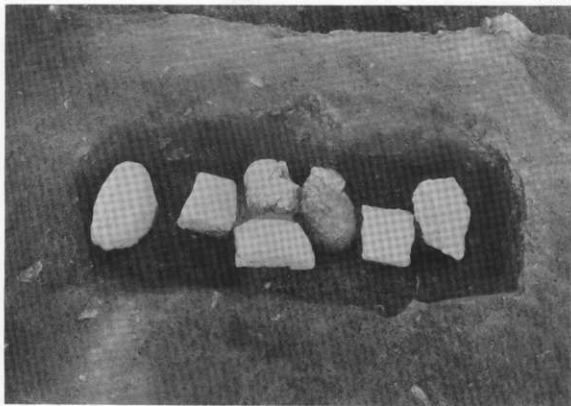




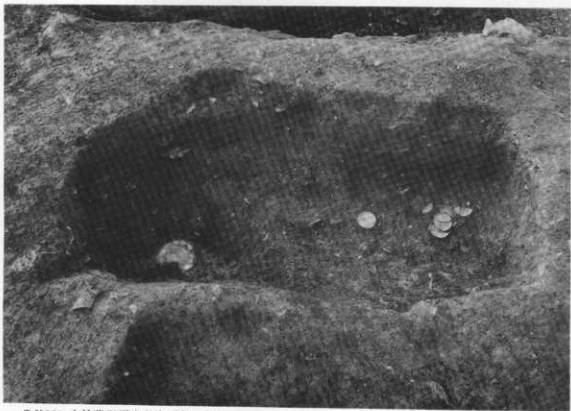
S X055 窯状遺構（東から）



S X055 窯状遺構（北から）



S X065 木棺墓（東から）



S X065 木棺墓配石除去後（東から）



SC080 (南から)
G地区



SC080 (南から)
H地区



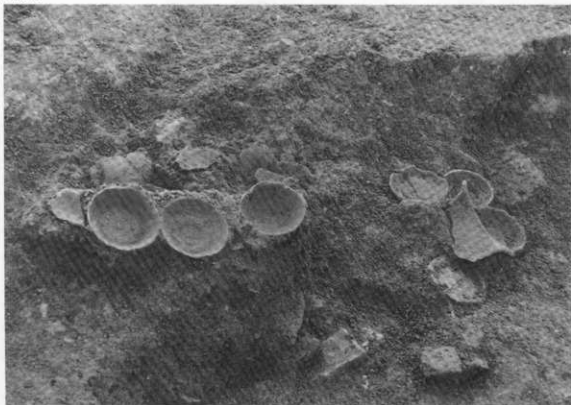
SC080 (西から)
H・I地区



SC080 回廊跡（北から）H・I地区



SC080 回廊跡雨落ち溝（北から）



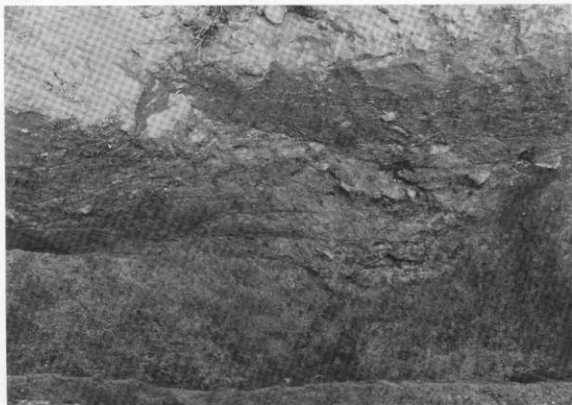
S K053 土器出土状态



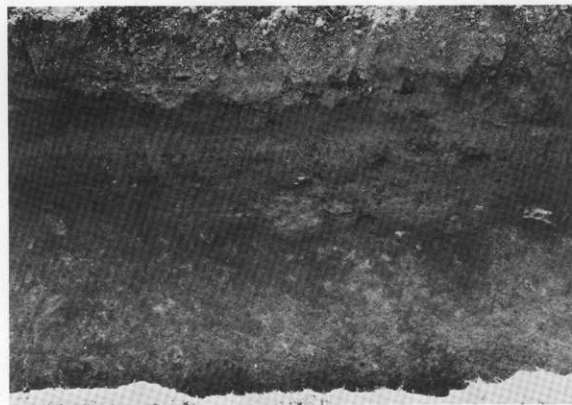
S K059 土器出土状态



第6次調査出土遺物



S D090 溝 (南から) 南トレンチ



S D090 溝 (南から) 北トレンチ

筑前国分寺

昭和52年度発掘調査概報

1978・3・31

発行 福岡県教育委員会

福岡市中央区西中洲6街区29号

印刷 株式会社 川島弘文社

福岡市東区穂崎上尾6-4-4